参考8

「雲仙岳の秘めたるパワー」P.23

雲仙岳と歴史・伝承②

●雲仙岳の立地と山容～古代から中世～

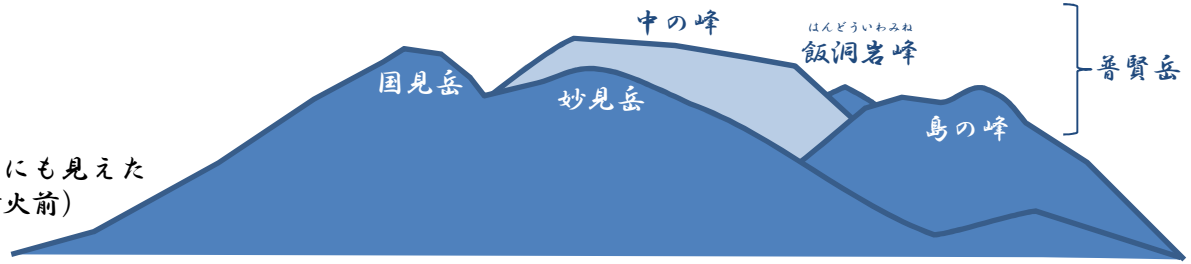
日本の山岳信仰は、仏教と神道の両方を取り込んだ“修験道”の形で展開されました。温泉山満明寺が仏教的に四面大菩薩を本尊としたのに合わせるように、神道的には温泉神社が温泉四面神を祭神としていました。高麗の４王女飛来伝承を背景に、身一つに面（顔）四つとされた温泉四面神は、一説には普賢岳（中の峰）を中心に４つの峰が取り巻いていた当時の雲仙岳主峰群の山容と関連性があるとも言います。温泉神社は満明寺が開かれた頃に創祀され、同時に山麓の４箇所(諫早・吾妻・千々石・有家)に分社が置かれました。山麓の集落にて祈願ができるよう、分社はその後増やされて、現在でも半島内に17分社が残っています。

実はこの温泉四面神、九州島そのものを表す神とされているのです。古事記において、筑紫島（九州島）には四つの面（地域）があるとされ、各地域を表す４柱（後に５柱とされた）の神々の名が記されており、その神々が温泉神社に祀られています。これは、雲仙岳・島原半島が九州島の（精神的な）中心地であった時代があったことを示唆しています。その後、中世に入って13世紀初頭、モンゴル（元）が九州に攻めてきた元寇の際、温泉四面神が戦場に現れ、元軍の一身三面の勇士（神）を迎撃したとの伝説があり、弘安４年（1281年）には九州の総鎮守とされ、九州各地の武将の崇敬を集めたと言います。九州各地から遠望でき、九州島と同様に“四面”の物語のある雲仙岳は、いつしか九州島のシンボルとなっていったと言えるでしょう。

温泉神社（本宮↑と有家分社↓）

現在、全国第２位の生産量を誇る島原半島の素麺は、中世より地域産品となっていたようで、島原藩主（有馬家）から江戸幕府への献上品に含まれていました。次項で紹介する島原・天草一揆の後に瀬戸内の小豆島から伝来したとの説もありますが、それ以前に中国南東部（福建省）から伝来したとの説が有力視されています。当地の手延べ製法の工程・道具・器具が、小豆島とは異なり、福建省の線麺と同じであるとの調査結果があり、福建省から島原半島に渡って来た技術者によって直接伝えられた可能性が指摘されています。
雲仙岳からの湧水、有明海の塩、肥沃な山麓で生産される小麦、雲仙岳から吹き下ろす乾燥した風が、名産・島原素麺を生み出しました。

島原素麺



四方に顔（面）があるようにも見えた
雲仙岳主峰群（平成噴火前）